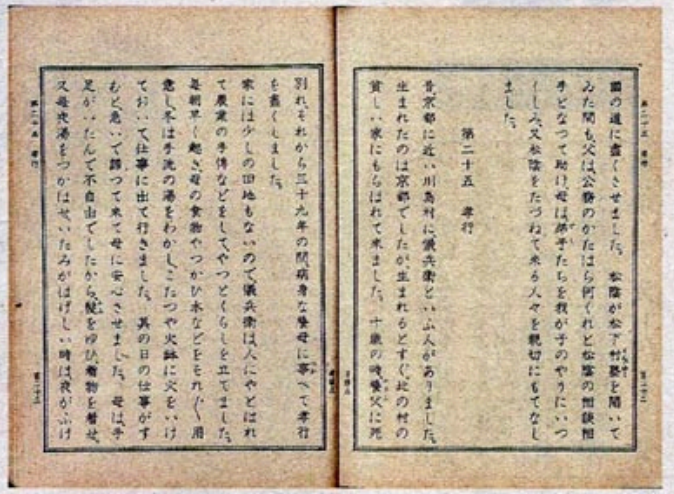
学びやタイムスリップ

㊼ 修身教科書の孝子儀兵衛（大正・昭和時代）

絵画の題材に、誇り尊敬



教科書に掲載された孝子儀兵衛の挿絵（上）、儀兵衛を紹介したページ（下右）、儀兵衛が取り上げられた教科書の表紙（下左）＝写真はいずれも文部省編「尋常小学修身書巻五」（1939年）

「孝子儀兵衛」という人物をご存じでしょうか。江戸時代中期の人で、京都の川島村（現在の西京区川岡学区）に住んでいました。

この儀兵衛は、戦前には全国的に知られていました。なぜなら、大正時代から戦前まで、国定の修身教科書に取り上げられ、優れた親孝行を行った人物、すなわち「孝子」として紹介されていたからです。

儀兵衛は四条堀川に生まれ、間もなく葛野郡川島村の農家に養子として

教科書にはこのような話が載せられています。

儀兵衛が仕事で京都や伏見に行き、帰りが遅くなると、養母は心配して、足も不自由なのに杖をついて迎えに行き、外で帰りを待っています。やがて帰ってきた儀兵衛の顔を見ると、安心して涙をこぼしたといいます。儀兵衛もまた母の迎えがありがたいと涙を浮かべ、しばらくお互いにものも言えず、儀兵衛は母の手を引いて家に帰っていきました。

こうした儀兵衛の行いは、江戸時代の心学者布施松翁がまとめた伝記『西岡孝子儀兵衛行状聞書』などによって世間に広められました。

その後、1916（大正5）年に文部省が国定教科書資料を募集した際、川岡尋常高等小学校の鈴木岩人校長がその話を応募、採用され、孝子儀兵衛は全国に知られるようになったのです。儀兵衛の墓がある冷聲院へは小学生が遠足で訪れることも多かったといいます。

また、孝子儀兵衛は絵画の題材にもされました。画家が手がけた掛け軸が学校に飾られていた例も見られ、京都出身の儀兵衛を誇り、尊敬していたことがうかがえます。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）